

『鏡の国のアリス』の一考察

平 倫 子

I. 『鏡の国のアリス』が出来上るまで

1979年の『ルイス・キャロル・ハンドブック』改訂版によれば、『ふしぎの国のアリス』は First (recalled) Edition は1865年、Second (First published) Edition は1866年に出版された、とある。^{*1} 1865年出版直後にそれを見た挿絵担当の画家、ジョン・テニエルは、7月10日付の手紙で、絵の印刷に不満があるむねドジソンにつげた。(周知のとおり、L. キャロルは、C.L.ドジソンの筆名であるが、ドジソンは本名と筆名を厳格に使い分けていた。本屋のカタログに〔Dodgson, C.L.〕*Through the Looking-Glass*とのもっているのを見つけると、「そういう名である本を出版してはおらぬ」と抗議の手紙を書き送っている。^{*2} ドジソンはすぐにマクミラン社に、刷りなおしを申し出て、8月2日の日記に「結局 *Alice* は刷りなおすことに決めた」と記している。『ハンドブック』によると、ドジソンは、はじめに50部を印刷してもらい、それを友人、知人への贈りもの用にあてている。テニエルもこれを見たものと思われる。テニエルは挿絵について、とくにその明暗に過敏症になっていたらしく、あとになって木版士のダルジェル宛に、「ドジソンの本は数ヶ月前にきましたが、印刷があまりにきたなく、私が強く不満をのべたので、彼はその版をキャンセルしました。リチャード・クレイが今、クリスマスに間に合うよう印刷中です。」^{*3}と伝えている。結局初版本は回収されたことになっているが、実際に初版2000部が出たのかどうかについては、いまだに疑問視されている。その後1866年になって Second (First published) Edition が、マクミラン社から出された。

『ふしぎの国のアリス』の誕生については、巻頭詩にもあるように、
‘1862年7月4日の輝ける午後’のイメージが強烈なあまり、その出版

の詳細についてまでは殆ど知られていないようである。

Second (First published) Edition の出版後間もなく、ドジソンは、続篇執筆の意向を友人や出版社にほめかしている。1866年8月24日付のアレクザンダー・マクミラン宛の手紙に、「……まだかなり先のことかと思いますが、何か *Alice* の続篇のようなものを書こうという構想を持っています。はっきりしたら、はじめから相談したいと思います。そうすれば何もかもうまくいくと思いますから」^{*4}と書いている。モートン・コーエンは、1979年 *The Letters of Lewis Carroll* を編集し、その中でこの手紙に次のような注をつけている。——草稿はすでに少しずつ書かれていたらしいが、至極ゆっくりであった。1867年12月15日、友人のF. H. アトキンソンに宛て「*Alice's visit to the Looking - Glass House* は着々と進んでいます」と書き送っている。そして1868年1月16日の日記には、Ripon でクリスマス休暇をすごしている間に *Alice* 続篇のために数ページ書き加えた」と記している^{*5}。

またモートン・コーエンが1971年に『鏡の国のアリス』出版百年目にあたってまとめた論文“*So You Are Another Alice*”によれば、ドジソンは1868年1月24日に出版社にあてて、「次の *Alice* の本の中の1ページか2ページを、鏡文字で印刷する方法はありますか」と第一章の詩「ジャバウォッキー」の印刷にあたって技術的な質問をしている^{*6}。コーエンは、このことから1868年はじめには、すでにドジソンが『鏡の国のアリス』の中心的なアイデアをかためていたとみることができると指摘している。更に論文の題名のもう一人のアリスであるアリス・セオドラ・レイクスとの出会い、それに伴うオレンジの実験もこの時期ではないか、とみている。

もう一人のアリスとの出会いおよびオレンジの実験については、D. ハドソンはもう少しあとの1868年8月という説をとる。ハドソンによれば、1868年6月18日にドジソンはテニエル宛に「挿絵を引受けてもらえてうれしい」と礼状を出していること、その後安心して新作に本腰を入れることが出来たと思われること、そして「ロンドンのオンズロウ・スクエアのスケフィントン叔父の家にドジソンが滞在中だったというから8月であろう」と推測するのである^{*7}。

コーエンのいう 'Another Alice' とは、前作 *Alice* の主人公、アリス・プレザンス・リデルに対するもので、二冊目の『アリス』本の意も

【鏡の国のアリス】の一考察

こめていたであろうが、主にアリス・T・レイクスのことである。彼女の家はサウス・ケンジントンのオンズロウ・スクエアにあり父は後の通信公社総裁ヘンリー・セシル・レイクス氏で、ドジソンが親しくしていたスケフィントン叔父とは、地つづき、縁つづきであった。したがってドジソンはアリス・レイクスとは遠いところにあたる。1862年生れで、当時6才であった。(コーエンは8才としているが当然6才であろう。)

叔父の家をおとずれたドジソンがアリス・レイクスに出会った時の様子やオレンジの実験については、1932年1月22日の‘タイムズ’紙に発表した彼女自身（その頃はアーサー・ウィルソン・フォックス夫人）の記事を引用しよう。

そのころ私どもはオンズロウ・スクエアに住んでおりまして、家の後にある公園でいつも遊んでいたものでした。チャールズ・ドジソンさんは年取った叔父さんの所におられて、後手に手を組んでは芝生をよく行ったり来たりしておられました。ある日、彼は私の名を聞きつけますと私を近くへ呼んで、「君もアリスか。ぼくはアリスって名前がとても好きだね。面白いものを見にこないか」と言いました。私どもは私の家と同じように公園に面したお家へとついてまいりまして調度のたくさんある一室に入ってゆきますと、一隅に丈の高い一面の鏡がありました。

「さて」と私にオレンジを一つ渡しながら彼は言いました。「どっちの手にあるか言ってごらん。」「右よ」と私はいいました。「今度はあの鏡の前にいって中に見えてる子がどっちの手に持っているか言ってごらん。」いろいろ困ったあげくに私は「左よ」と答えました。「その通りだね」と彼は言いました。「どうしてだか言ってごらん。」私には説明できませんでしたが、ともかく何か答えなければならぬので、私は思いきって「もし私が鏡の向う側にいるとしたら、オレンジはまだ私の右手にあるかしら」と言いました。その時の彼の高笑いを今でも思い出します。「上出来だ」「今までで最高の答だよ。」と彼は言いました。

その話はそれっきりでしたが、何年もたってから、『鏡の国』を初めて着想したのがこの時のことだと氏が言っているということを知りました。その本も氏の他の本ともども私のところへ届けられてきま

した。^{*8}

この出会いがいつであったかは、進行中だったドジソンの第二の『アリス』を考える上で非常に重要な課題である。しかし、レイクス家の人々はドジソンの日記では1871年6月24日になってはじめて次のように出てくる。

「芝生の上に小さなアリス・レイクスがいた。彼女をレイクス夫妻と一緒に家に呼び、近づきになった。」^{*9}

もしそうだとすれば、オレンジの一件はあまりに遅すぎると思われる。というのは、『鏡の国のアリス』の第一章で、すでにアリス・レイクスによってドジソンが鼓舞されていた、と思われる鏡のテーマが、この物語全体の導入部として書き上げられていたに違いないその第一章の原稿を、ドジソンは1869年1月12日に出版社にまわしているのであるから。この点について、コーエンは、ウィルソン・フォックス夫人（旧姓アリス・レイクス）かドジソンの記憶ちがいではないだろうか、さもなければ、鏡の一件はもっと早く起っていたはず、と指摘する。^{*10}

たしかに時期的には遅すぎるが、どちらかの記憶ちがいと言ってしまうには証拠が不十分である。しかもドジソンのほかの例から判断して、1869年1月にその時点で完全な原稿を出版社にまわし、そのあと1871年にアリス・レイクスに出会い、鏡の実験からそれまでの意図とは違う新しいモチーフを得たとしても、ゲラ刷りへの加筆訂正は可能と考えるべきであろう。

ここでもう一例、遅すぎると思われるエピソードがある。ドジソンの写真好きは有名であるが、手におえない少女モデルの一人であったローズ・L・ウッドが、1932年2月15日付‘タイムズ’紙に載せた記事から明らかになったものである。

私は両親とオックスフォードに滞在していました。12才ごろだったと思います。ルイス・キャロルが私をお茶によんでくれました。両親と一緒にではなく、私一人が招待されたことを非常にうれしく思ったものです。楽しい午後でした。彼は *Alice Through the Looking-Glass* (原文ママ) の校正刷りを見せてくれ、そのかなりの部分を読んでもくれました。ところで、赤の女王を何にかえたらいいかきまらないんだ」と彼がいました。私は「彼女は怒りっぽいから黒ねこにかえ

てください」というと、彼は「それはすばらしい」といい、「そんなら白の女王は白ねこにしよう」と言いました。その冬その本が出た時、彼は私の名前を入れ、‘作者より’と書いた大変価値ある本を送ってくださいました。^{*11}

この記事が正しい記憶にもとづいているとするならば、“その冬その本が出ると”と書いていることから、この一件も1871年のある時期と思われるが、赤の女王を黒ねこに、白の女王を白ねこに、というアイデアは充分間にあって【鏡の国のアリス】を飾っているのである。興味深いことに、前述のアリス・レイクスは1932年1月22日付、ローズ・ウッドは同年2月15日付、どちらも“タイムズ”紙であることから、この年“タイムズ”紙はキャロル生誕100年の特別企画を組んだものと思われる。

なお、ドジソンとレイクス家の人々は、その後も友好をたもち、特にアリス・レイクスは長く、深くドジソンとかかわり、敬愛しつづけた。その薫陶をうけてか後年彼女自身も文筆家となり、伝記や歴史小説や子どものための本などを執筆した。コーエンは前述の‘So You Are Another Alice’の中で、ドジソンには「一旦成長した子どもとは絶交する」という神話があったといわれているが、実際はそうではなく、アリス・レイクスがその好例である、と述べている。

1893年3月24日にドジソンはウィルソン・フォックス夫人(旧アリス・レイクス)に次のような手紙を送っている。

親愛なるアリス

お手紙ありがとう……11日にお宅にお寄りしそようになったのですよ。でも音楽的な、いやむしろ非音楽的な理由にさまたげられてやめました。…15分ほど時間があったので‘たずねて、御主人にお会いして、ドロシーちゃん(筆者注：彼女の二番目の娘の名前)にも紹介してもらおう’と思ったのですが、玄関のそばまで行くと反対側の家から、耳をつんざくような手回しオルガンの音がしたので、これじゃああなたの家も家じゅう騒音が響きわたっているだろうから、お話をするのは無理と考えました。そこでその辺をひとまわりして、いまいましいオルガニストに拷問をやめさせる時間を与えましたが、だめでした。それどころか一時間も二時間も続けるような気配でしたので、絶望して帰途につきました。また改めてうかがいます。出来た

ら御在宅の日時をあらかじめ知らせて下さい。 敬具

C. L. ドジソン ^{*12}

「別な機会はそれから10日後におとずれ、昼食をともにした」とドジソンは4月3日の日記に記している。^{*13} ドジソン61才、ウィルソン・フォックス夫人31才の時のことである。

次にドジソンの新作本の挿絵画家について一考してみよう。最終的には今われわれが手にするように、テニエルが担当したが、そうなるまでにはいろいろ問題があったのである。前作がテニエルの挿絵の効果も含めて好評を博したので、当然ドジソンは、続篇も彼にたのんだ。しかしドジソンは「自分の要求がどのように実行にうつされるかについては批評家のごとく厳しく追求する」^{*14}ので、テニエルは話を持ちかけられた時、あの挿絵で彼の名声が上がったにもかかわらず、忙しいという理由で断った。これは1866年8月24日ドジソンが続篇執筆の意向をマクミラン社に伝えた直後のことと思われる。

テニエルに断われ、絶望的になったドジソンは、1867年1月、テニエルの忠告もあって、「パンチ」誌と縁のあるリチャード・ドイルにたのんだが、なしのつぶてだったため、4月に再びテニエルに頼むが、「1870年でもよいのなら」という条件つき返事であった。そこでドジソンは、ノエル・ペイトン卿に話してみるが、病気を理由に断られ、テニエルこそ適任であると諭された。やむなく1870年まで待ってもテニエルに画いてもらう決心をし、1868年6月18日付で「『アリス』続篇の挿絵を、ひまをみてやってくれる、という申し出に感謝する」手紙をテニエルに送る。^{*15} これで当面の問題は、一応の解決を見ることになった。

コリングウッドの【伝記】によれば、詩集【幻想魔景】(*Phantasmagoria*, 1869)出版直後、1869年1月12日、ドジソンはマクミラン社あてに、【アリス】続篇の第一章分を送っている。はじめは *Behind the Looking-Glass and What Alice found There* という題にしようと思っていたらしいが、印刷にまわす段階で *Looking-Glass House and What Alice saw there* にかえている。その校正刷りは、ロサンゼルスのハンティントン・ライブラリーに保存されている。^{*16} なお、ドジソンは【伝記】の中で「*Behind the Looking-Glass and What Alice*

【鏡の国のアリス】の一考察

*found there*という暫定的な題でマクミラン社に第一章の原稿を送った^{*17}としているが、証拠はなく、間違いではないかと思われる。もっと早いころのドジソンの手になるタイトル・ページのデザインの下書きは、ハーヴァード・カレッジ・ライブラリー（マサチューセッツ州ケンブリッジ）のアモリー・コレクションに見ることが出来るという。

1870年の校正刷りと1872年の初版本とでは、タイトル、挿絵の数、章の数、章の見出しなどに多くの違いが見られる。【ハンドブック】63ページおよび図版Ⅶ、Ⅷを参考にして、次にそれをまとめてみる。

1870（校正刷）		1872（初版本）	
Looking-Glass House		Through the Looking-Glass	
And What Alice Saw There		And What Alice Found There	
挿絵42		挿絵50	
全11章		全12章	
	(章)	I	Looking-Glass House
		II	The Garden of Live Flowers
		III	Looking-Glass Insects
		IV	Tweedledum and Tweedledee
見出しにちがい……………	V	V	Wool and Water
		VI	Humpty Dumpty
		VII	The Lion and the Unicorn
見出しにちがい……………	VIII	VIII	'It's My Own Invention'
		IX	Queen Alice
X Waking……………	X	X	Shaking
		XI	Waking
XI……………	XII	XII	Which Dreamed it ?

タイトルを現在のように決めるにあたっては、ドジソンと、クライスト・チャーチの特別研究生仲間であり、長年の親友でもあった、ヘンリー・P・リドンの示唆によるといわれている。^{*19}なお、現在のタイトルが初めて見られるのは、1870年6月25日のドジソンの日記の中である。^{*20}5章と8章の見出しに違いがあるほか、巻頭詩は、レイアウトは同じであるが、

ドジソン手書きの訂正が5ヶ所に見られる。

- (1) 四聯4行目 A Wilful weary maiden! が A melancholy maiden に。
- (2) 五聯1行目 Without, whirling wind and snow が Without frost, the blinding snow に。
- (3) 同じく2行目 The lash themselves madness が The storm-wind's moody madness に。
- (4) 一聯6行目、二聯6行目そして六聯6行目の'feary' が fairy にかえられ、以後すべて fairy に統一された。
- (5) 六聯6行目 The pleasures of our faery-tale が The pleasure of our fairy-tale に。

以上のちがいが何を意味するか、については後にゆずることにして、ここでは、ドジソンが1870年出版を企んでいたにもかかわらず、初版本の印刷がおおはばに遅れたわけを調べてみる。遅れの原因は、大きく分けて二つある。一つはテニエル側に、もう一つはドジソン側に、である。

テニエルは、「急がないのなら」といって挿絵を引受けたのではあったが、その仕事ぶりがあまり散発的だったので、ドジソンを非常にいらだたせた。ある部分の挿絵を画くのに気が進まなかった、というのも事実である。その頃ドジソンは挿絵のおくれに気をもみながら、胸のうちをこぼす手紙を数多く書いている。

1868年12月11日 アグネス・アーグルズ宛

アリスの続篇のことだけど、今まさに印刷にまわそうとしているところですよ。——テニエルが、来年のクリスマスまでには、挿絵を仕上げしてくれるといいんだが——それだってずい分待たなきゃならないよね。でも我慢は美德、子どもには我慢が大事なのだよ。ドーリーも子どもだもの。だったら我慢しなくちゃ!

最後の文章はきみをちょっぴり怒らせたんじゃないかな? さあ白状しなさい。……ああ、そこにいなくてよかった。

ドジソンより *21

(アーグルズはドジソンの少女友達の一人でドーリーは愛称。『ふしぎの国のアリス』を読んで以来ずっと、つづきを早く書いて、とドジソンにせがんでいた。)

1870年2月20日 マーガレット・ギャッティ宛

去年の12月にいただいたご親切なお手紙に返事も出さず失礼しました。私としては、クロウフォード・ウィルソン作の小説について、あなたに申し上げることは何もありません。その本の編集者は私に何もいつてきておりませんし、*Elsie's Adventures in Fairyland*なるものも聞いたことがありません。それが私の *Alice* (筆者注:「ふしぎの国のアリス」)の前に出たものか、後に出たものかわかりませんが、^{*22}どっちにしても、二つのタイトルが危険なほど似ています。

あなたが書いてくれた、アメリカの著作権侵害者からの賠償についての問い合わせの件は、マクミラン氏の賛同を得られませんでした。——私は一ペニーだってとれないだろう、と彼は断言しました。続篇で出し抜いてやりましょう。絵の写しに手間どっている間に、アメリカで廉価版を出すなどして。その英国版を、10月末に間に合わなければ、11月初めにお送り出来ることを祈っています。テニエル氏もそのつもりで絵にかかってくれています。…^{*23}

(アルフレッド・ギャッティ夫人、旧姓マーガレット・スコットは、当時子どもの本で一番ポピュラーだった『自然のたとえ話』(*Parables from Nature*, 1855)の作者で、雑誌“Aunt Judy's Magazine”の創刊者および初代編集長であった。オックスフォードに住み、ドジソンとは早くからの知り合いであった。)

1870年4月19日 メアリ・マーシャル宛

きみの手紙としおりを今朝ルイス・キャロル氏にとどけました。しおりはうれしいといていましたけれど、受取りたくない様子でした。「あの本はプレゼントだったのだ、お返しはいらない！」なんて言っていました。でも私がなんとかなだめて受取らせました。

彼はきみの手紙を見て、「あの本をあげるには大きすぎた、きみはあの子の年令を間違えたに違いない」と私に言いました。「13才」じゃなくて「30才」じゃないのか？ 13才でこんな字の書ける子がいるもんか！ というわけです。でも私は彼によく言ってきました。きみが本当に子どもで、海の底のとても名門の学校で勉強したんだって。

彼はアリスについてもう一冊本を書いています。今度のは、暖炉の上の鏡をくぐりぬけて、その向うに見えるすてきな家に入ってゆ

くお話なんです。でもいつ頃出来上るのか私にはわかりません。……^{*24}
(メアリ・マーシャルは4月13日、ギルドフォードからオックスフォードへの車中でドジソンが出会った少女で、「ふしぎの国のアリス」を送ると約束し、その約束どうり本を受取ったマーシャルの札状への返信である。差出人はドジソンで、キャロルを第三者であるかのようにみせている。)

「アリスについてのもう一冊の本は、いつ頃出来るかわからない」と他人ごとのように書いているが、ドジソンにとっては、この時期は出版の目処がたたないままに焦燥の日々であった。テニエルからあの「かつらをかぶった雀蜂」の削除を考慮してほしい、という絵入りの手紙がきたのも、この後間もなくであった。

1870年6月1日付テニエルからキャロル宛の手紙

(筆者注：冒頭に第三章はじめの部分のスケッチがある。)

鉄道の客車の内部

一等車、アリスは一人ですわっている。

白い紙の服を着た男が本を読んでいる。

非常に暗く、ぼんやりした場面。

正面、オペラグラスを持った車掌が窓からのぞいている。

親愛なるドジソン

鉄道の場面で、客車が跳び上るところは、老婦人の髪ではなく、アリスの手に一番近い山羊のひげをつかまえさせる方がよいかと思えます。急に跳び上るなら、たいていみんな一緒に投げだされる筈です。

ぶしつけだとお思いでしょうが、「雀蜂」の章は私に少しも興味をいだかせない、と言わざるを得ません。しかも絵の描きようがありません。もしこの本を短くしたいというご意向があれば、——恐れながら——いまがその時かと存じます。

とり急ぎ

ポーツダウン

敬具

J・テニエル^{*25}

104年後、そのゲラ刷りが発見され、どんな騒ぎになるかなど考えるすべもなく、当時のドジソンの心境として、一日でも早く本を出したい一心で、このテニエルの申し出を受入れたのである。しかしテニエル側の遅れはその後もつづき、1871年8月の時点でドジソンはテニエルから

【鏡の国のアリス】の一考察

まだ絵を27枚しか受取っていなかった。(全葉は50枚である。)そしてテニエルに、「9月29日の聖ミカエル祭にも間に合いそうもない、というのは憂鬱だ」^{*26}と書き送っている。

こうみてくると、出版の遅れは、テニエル一人の責任のように思われるが、実はそうではなく、当のドジソン側も、種々雑多な遅れの原因をかかえていたのである。

ドジソンは、「ジャバウォッキー」の詩をどのように印刷するかで1869年1月24日にマクミラン宛に、印刷上の技術的な方法の問い合わせをしていることは先に見たとおりである。その時は7聯全部を鏡文字で印刷しようとしたが、一週間後に、二ページも鏡文字が続いては読者が苦痛であろうと考え、現在のように一聯だけに決めた。^{*27}

【鏡の国のアリス】の直接のヒントは、グスタフ・フェヒナーの『四つのパラドックス』（1846）であるともいわれているが、^{*28}はっきりしたことは解らない。しかし、マーティン・ガードナーの『詳注アリス』や『自然界における左と右』そして『数学パズル』などは、鏡が今の時代に意味するところまでも解明していて興味深い。

つねに自分の作品を芸術的により完全なものにしたいと考え、そういう作品を読者に提供しようと心がけていたドジソンは、*Looking-Glass House* のタイトルページの印刷（校正刷り）に、次のように細かい文句をつけている。

1870年4月15日 マクミラン宛

このタイトルページは、まだ納得できる出来上りとは言えません。印刷所の方が小生の指示にちゃんと従っていないためです。大文字は行の線の上よりも下の方に出るよう、大体二倍ほど下の方が大きくなるようにして下さい。手を入れてお返ししたものではありませんが、他は大体いいと思います。

その二。「そして」という文字は二行のちょうど真中をお願いします。上の方に寄ってはダメです。

その三。タイトルの三行はもっと間隔をつめます。但し、ページの上端に余り近づけないように願います。

その四。コンマやピリオドはもう少し低い位置にしてもらいたいと思います。

以上の間違いについては同封の一部の中ですでに直しておきました。直していないものも一部御送りしますのでよく二つをお比べになって下さい。^{*29}

出版社への注文のみにとどまらず、ドジソンはテニエルにも遠慮のない注文をつけている。「アリスのスカートにあんなに張りを入れるな」とか、「白の騎士にほほひげはおかしい」^{*30}などである。しかしこういった注文ならまだほほえましい。

テニエルが怪獣「ジャバウォック」の絵を本の口絵にあてると言ってきたことにドジソンは非常に驚き、あの怪獣の絵が、小さな読者たちをこわがらせはしないか、と気づかい、1871年2月15日に、次のような手紙を書いて、30人の母親たちに回し、子どもたちの卒直な反応や、口絵としての是非を問うた。

1871年2月15日 J・ベリー夫人宛

『鏡の国のアリス』の口絵にどうかと思われる絵の写しをこの書面と共に回します。この怪獣はちょっと生ま生まれすぎるので、こわがり、感受性の鋭い子どもにはよくない、もっと穏当な絵で開巻ページ目を飾った方がいいと言ってくれる人があるのです。

ついては、友人諸賢の御意見を伺いたく、問題の口絵をたくさん刷らせた次第です。

可能性は三つあると思います。

- (1) この絵をそのまま口絵にする。
- (2) この絵は物語中のしかるべき場所（つまりこの絵が挿絵になっているところの詩が出てくるページ）に移し、何か別の絵を口絵にする。
- (3) この絵はどこにも使わない。

第三の方法ですと、この絵をかくのに要した時間と労力は一切無駄になってしまうわけですから、是非ともこの方法が必要というのではない限り余り採用したくありません。

どの方法が一番よいか、ひとつ御高説たまわれれば深甚感謝致したく（適当なお子さん方にお見せになって反応を御覧下さい）。^{*31}

この結果、第二の方法に落ち着き、現在のように口絵には白の騎士の絵を、ジャバウォックは第一章のしかるべき場所に収まった。以上の

『鏡の国のアリス』の一考察

ようなことから、テニエルが後になって「『鏡の国のアリス』の挿絵をかいて、挿絵をかく力は私から消え失せた。以後その方面の仕事はしていない……」^{※32}ともらしているのもうなづけるのである。

かくしてようやく1871年11月に全部が印刷にまわされる運びとなり、ドジソンは11月1日の日記に「急ピッチで印刷中」と書いている。そして12月はじめには出来上っており、12月6日の日記には「今日最初の一冊を受取った」と記入している。確かに1871年12月初めに初版本9000部が出版されたのであったが、そのタイトルページに1871と印刷されたものは一冊もなく、12月6日に受取ったドジソン自身の本（1898年5月のドジソン遺品セール品番690番）も、ドジソンから贈られたアリス・リデルの本もすべて1872と印刷されていた。

これはおそらく、印刷の段階で全体の進行情況からみて年内出版は無理とみた出版社の判断によるものであろう。ドジソンの焦燥もいつしか諦めが変わっていたのかもしれない。1871年12月に彼は、「‘アリス’の小さな読者たちへ」というパンフレットを出している。それはクリスマスとお正月にむけて、キャロルからの手紙という形で書かれたものであるが、その中では『鏡の国のアリス』については何も触れられていない。『ハンドブック』60ページの解説によれば、多分それは、1872年増刷分の『ふしぎの国のアリス』と出来たばかりの『鏡の国のアリス』に折り込み付録として用いられたのではないか、ということである。

出版と同時に評判も売行きも上々で、12月16日付の「アセニウム」誌は、「ここで、われわれが手にしているのは、ただの本ではなくて……すべての世代の数限りない子どもたちに向って差出された幸福の宝庫」^{※35}とほめちぎった。ただちにマクミラン社は6000部増刷の提案をするが、ドジソンは12月17日付でマクミラン氏に次のようにこたえている。

売り上げがどうであろうと、ともかく芸術的な観点から見ての「失敗」をこれ以上認めまいと小生は決心しました。このことを急いでしたためるのも、あなたからのお手紙を今朝拝受したからです。びっくりしました。「できるだけ迅速にもう6000部出したい」ですって？小生の決心をお聞かせしましょう。迅速に。こいつは願ひ下げにしてもらいたい。刷ったものを白紙の下に入れて押すのもいけません。今後は刷りを「積み重ねて」自然に乾くのを待つようにと特にお願ひしま

す。そんなことをしてたらこの6000部、出荷は一月末に、いやもっと遅くになってしまうとお考えですね。結構じゃないですか。一月末だろうと何だろうとその日付で広告すればいいのです。「絵の刷りに完璧の芸術的効果を与えるのに遅れを生じ、ために増刷分は一月末日までお待ち下さい」と伝えておけばいいではありませんか。

みすみす大金を失おうなど、この男狂っているのではあるまいかとお感じでしょう。こうやって何千ものお客を逃してしまうのか、誰もそんなに長く待っているわけがない、お客はクリスマスのために他の本を買ってしまうだろう、とそんな風におっしゃりたげですね。はっきり書いておきますが、そのような議論一切に小生は聞く耳を持ちません。売り上げなど小生の知ったことではありません。小生が特に注意を払うのはただ、売られている本が一冊残らず第一級の芸術品であるかどうかという点だけです。^{*36}

Ⅱ. 「かつらをかぶった雀蜂」について

すでにふれたように、この部分は、『鏡の国のアリス』の中の一部として書かれたが、1870年6月1日付の手紙でのテニエルの削除申し込みにより省かれたものであった。1898年12月（ドジソンの死後11ヶ月）、彼の甥のスチュアート・ドジソン・コリングウッドがその著『ルイス・キャロルの伝記と書簡』の中ではじめてこの事実を明らかにした。つまり、

この物語は、もともと書かれたときは13章であったが、刊行された本では12章になった。削除された部分では、雀蜂を裁判官もしくは弁護士といった役まわりで登場させたと思われる。というのも、テニエル氏が「かつらをかぶった雀蜂というのは、とうてい挿絵にならない」と記しているからだ。挿絵のむずかしさを別にしても、「雀蜂」の章はこの作品のほかの部分の水準に達しているとは考えられなかったのであって、削除されたおもな理由はたぶんそれだった。^{*37}

というもので、これにつづいてテニエルの手紙のファクシミリがのっていた。（本文 P. 172 参照）コリングウッドがこのような曖昧な推論をしなければならなかったのは、ドジソンの死後4ヶ月たらずで遺品を競売に付してしまったため『伝記』執筆にあたり入念に考証する資料が手

【鏡の国のアリス】の一考察

もとなかったからであろう。

1960年「註注アリス」を書いたマーティン・ガードナーもこの削除部分のことにふれているが、その時点では「この消えた一章については残念ながら何も残っていない」としている。またハドソンの「ルイス・キャロルの生涯」には、コリングウッドの指摘と全く同じく「判事または弁護士という役どころで一匹の雀蜂が登場する第13章があった」と^{*38}なっている。(この「雀蜂が登場する第13章」というのはハドソンの思い違いである。)

しかしこの部分は、1974年、ロンドンの競売業者サザビイ・パーク・バーネット社が6月3日の競売のカタログに、次のように載せたことから保存されていることがわかった。

ドジソン (C.L.) 筆名「ルイス・キャロル」。「鏡の国のアリス」削除部分ゲラ刷、64—67ページ、63、68ページ一部、黒インクによる自筆校正、および当該部分全面削除の旨の自筆朱色インクによる指定あり。本部分には、アリスが不機嫌な雀蜂に出会う話が収められており、「若かりしわしの卷毛は波うって」ではじまる五聯の詩が組み込まれている。これは初版本83ページ、「わずか2、3歩で、アリスは小川のふちについた」につづくはずの部分であった。校正刷は1898年、オックスフォードにおいて作者の家具調度、所持品、秘蔵書が売却された折に買いとられた。明らかに記録にはなく、未発表のものであるらしい。^{*40}

なお1974年5月17日、24日、31日の3回にわたり「タイムズ文芸附録」にも次のような広告が見られる。

<h1 style="margin: 0;">Sotheby's</h1> <p style="font-size: small; margin: 0;">FOUNDED 1744</p> <p style="margin: 0;"><i>The largest firm of art auctioneers in the world</i></p>		<p>34-35 NEW BOND STREET, LONDON W1A 2AA</p> <p>Telephone: 01-493 8080 Telegrams: Abirfoto London</p>
<p>MONDAY, 3rd JUNE, at 10.30 a.m. at New Bond St.</p> <p>CHILDREN'S BOOKS, DRAWINGS AND JUVENILIA</p> <p>the properties of Lady Anne Hill, Mrs. P. Heyes, Mrs. Josephine Banner, the late Mrs. E. H. Wyllie, and other owners, including the first part of Andersen's <i>Eventyr</i>, Copenhagen, 1835, the first published edition of Lewis Carroll's <i>Alice's Adventures in Wonderland</i>, 1866, galley proofs for a suppressed portion of <i>Through the Looking Glass</i>, A. Gable's <i>Skizzen physischer und moralischer Gegenstände für die Jugend</i>, Nuremberg, c. 1760, Beatrix Potter's <i>The Tailor of Gloucester</i>, December, 1902, Harriet Beecher Stowe's <i>Uncle Tom's Cabin</i>, 2 vol., Boston, 1852, and extensive groups of books illustrated by Kate Greenaway and Arthur Rackham. Clapbooks, miniature books, moving picture books, panoramas, peepshows and games. Drawings and illustrations by Walt Disney, Edmund</p>	<p>Dulac, Kate Greenaway, Arthur Rackham, Harrison Weir, and others. <i>Cat. (7 plates) 30p</i></p> <p>TUESDAY, 4th JUNE, at 11 a.m. at New Bond St.</p> <p>THE CELEBRATED LIBRARY OF THE LATE MAJOR ABBEY—The Eighth Portion comprising the Hornley Manuscripts, Part 1; thirty-four Manuscripts of the 11th to the 15th century. <i>Cat. (37 plates, including 7 in colour) £3</i></p> <p>THURSDAY, 6th JUNE, and following day, at 1 p.m. at 115 Chancery Lane, London WC2A 1PX (Hodgson's Rooms)</p> <p>PRINTED BOOKS the properties of Mrs. V. M. Henderson, J. Harris, Esq., and other owners, comprising art and art reference books; English and continental literature and history of the 17th to the 20th century; topography, archaeology and science. <i>Cat. (1 plate) 20p</i></p>	

この未発表の部分は、ドジソンの死(1898年1月14日)後、1898年5月10日、11日にオックスフォードで行なわれた遺品のオークションで、雑多な未確認の品目とともに買いとられたものの中にあつたらしいが、1974年のサザビイの競売までどこにあつたかは明らかにされていないし、売主の名も明かされていない。ゲラ刷りはマンハッタンの特異本業者ジョン・フンミングが、ニューヨークのノーマン・アーマー二世の依頼によって買いとった。その後ノーマン・アーマー二世がマーティン・ガードナーの解説つきということで出版に応じることになり、1977年9月4日号の「テレグラフ・サンデー・マガジン」にモートン・コーエンの“Alice: The Lost Chapter Revealed”という文とともに始めて写真版が掲載された。^{*42}

その後、すぐに北アメリカ・ルイス・キャロル協会出版委員会が、マクミラン社の協力を得て出版することになった。当初は750部の限定出版と、他に北アメリカ・ルイス・キャロル協会々員のためのものと二種類出されたが、後にアメリカ・イギリス両国で出版された。^{*43}わが国では1978年11月に翻訳出版されている。^{*44}

筆者はこの部分は、前に見た1870年の校正刷りから脱落したのではないかと考える。1870年6月1日のテニエルの手紙の時期とこの校正刷りの時期とは無関係ではあるまい。もしそうだとすると、コリングウッド(そしてそれをうけているハドソンも)のいうもともと13章あつた、という点とはかみ合わなくなるが(なぜなら1870年の校正刷りは全11章であつたから)、コリングウッドが(ハドソンも)その内容までは正確に把握していなかったこと、従って推測の域を出ていないことも考え合わせる時、もう一章あつたのなら現在は12章であるから、13章だつた筈だ、という単純な思い込みがあつたのではないか、と思うのである。

ガードナーはその解説で「雀蜂の話は白の騎士の章(つまり第8章)の一部であつたのか、それとも別の独立した章だつたのか興味深い問題が生ずるが、まだわからない」とのべて、それを解決するには間接的な証拠に基づいて決定しなければならない、としている。更にこの話には本質的な価値があるのだろうか、とも問いかけ、テニエルはじめおおかたはコリングウッド流に「この作品の他の部分の水準に達していない」と考えているとのべているが、ガードナー自身は、丹念に読めば今後価値は明らかになるに違いないと言っている。

【鏡の国のアリス】の一考察

ここで、ガードナーの問題提起をうけて、挿話か章かについて考えてみよう。それに先立って、どの部分に入るべきものであるか、を考えなければならないが、内容から見てゆくと、ガードナーも言っているように、サザビイのカタログは、その個所を正確に示している、と見てよい。

つまり第八章の終りの部分でアリスが小川を渡る前、

…騎士は曲り角に達し、そこでアリスはハンカチを振り、その姿が見えなくなるまで、じっと待っておりました。「元気出たかしらね。」向きを変えて丘を下り始めながら、アリスは言いました。「さあ最後の小川よ。これで女王様だわ！ すてきねえ！」ほんのちょっと歩くともう小川のふちでした。「とうとう第8の目なんだ！」そう叫ぶと彼女はびよんと飛び越え

* * * * *

するとあちこちに小さな花壇がある、苔みたいにやわらかい芝生の上におりていました。「ここへ着けて何てうれしいこと！ あら、頭の上のこれ、なんなのかしら？」びっくりして彼女は叫びました。手も頭にもってゆくと、何だかとても重たいものが頭のまわりにぴちっとはまっていたのです。

「私の知らない間に、どうしてこんなものがのっかっているのかしらね。」ひとりごとを言いながら、そのものを下げ、ひざにのせて、一体なんなのか見ようと思いましたら、

なんと黄金の冠^{※45}でした。

矢印がサザビイのカタログが示した箇所である。第八章には白の騎士がアリスをなぐさめようとうたう「鱈の目」と呼ばれる詩が出てくる。(この詩の題についての白の騎士とアリスのやりとりは非常に面白い。白の騎士はときに第六章のハンプティ・ダンプティのように言葉をあやつる。)

次に詩「鱈の目」と【雀蜂】の話に共通する点をあげてみよう。

「鱈の目」
老いに老いたる人
門の上にすわる
心の憂さに気もふさぎ

【雀蜂】
かなりのお年寄りらしき姿
(額は雀蜂のよう)
地べたにすわる
すっかりからだをちぢこませ

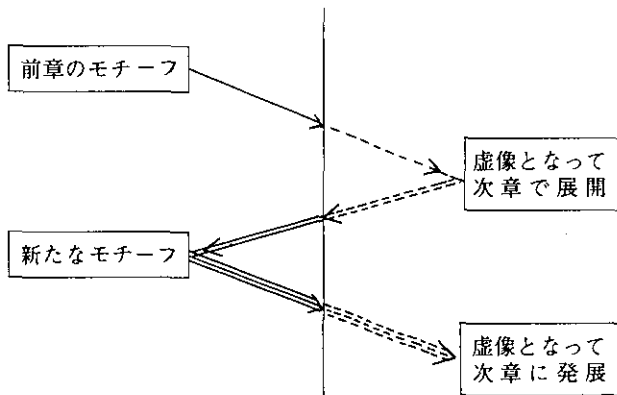
体を前後にゆきぶって
何者かたとずねるもの
と、こたえる老人
髪、髪あぶら

寒そうにおるぶるふるえて
どうしたのってきいてあげるアリス
と、こたえる雀蜂
黄色いかつら

これらのほかに第8章はじめには、蜂の巣箱や、蜂蜜への言及もある。このように前章のモチーフを次章でくりひろげるのは、ドジソンが『鏡の国のアリス』の中でよく用いる移行のパターンである。『鏡の国のアリス』の構成を俯瞰してみると、物語の全容は第一章および第二章にすべて集約されているのがわかる。第一章でチェス盤がしかれ、そこに鏡が立てられ、自然の移ろいが語られる。第二章でアリスは赤の女王に会い道をたずねると、白の歩 (white pawn) になれといわれ、道を教えられる。これが即ち物語の構成を読者に知らせることにもなっている。

2ヤードの杭のところど女王様はふり返ると、言いました。「歩は最初の一手で二目進むのじゃ。だからして、ぼーんと第三の目へ行くのじゃ——汽車を使うてな——するとたちまち第四の目にいよう。この目はトゥイドルタムとトゥイドルディーのものじゃ——第五の目は水ばかり——第六の目はハンブティ・ダンブティ—中略—第七の目は森だらけじゃ、騎士が一人、道案内をしてくれよう——そうして第八の目で、わしらは同じ女王となって、飲めや歌えの宴なのじゃ。」^{*46}
このようにモチーフが描き出されるのである。章から章へは更にこれが鮮明になり、ちょうど

鏡



左図のような、チェスのナイトの動きを左右に振りわけたような動きでモチーフが移行してゆく。しかも一つとして同じではないのであるからハンブティ・ダンブティのいう不可入性(impenetrability)^{*47}を侵すこともない。

では現在の【鏡の国のアリス】の第八章から第九章への移行を見てみよう。第八章で白の騎士が詩「鱈の目」をうたう場面は、

それから片手でゆっくり拍子を取りながら、まるで我が歌のしらべに酔うかのように微笑を浮かべると、そのやさしい間の抜けた顔にぼっと光がさしました。そして、彼は歌いはじめました。

鏡の国の旅でアリスが出会った不思議なことどもの中でも、これこそは彼女が後になって最もあざやかに覚えていたものでした。—中略—白騎士のおだやかな青い眼とやさしい微笑と——その髪に映える落日は、その甲冑にもまばゆく照り映えて、全くアリスの目を眩ませるばかり—中略—うしろの方には森が落とす黒々とした影がありました——これら全てをまるで一幅の絵のように、手をかざし木にもたれかかりながら、アリスは見ていました。^{*48}

と、こうである。それから前に引用したように、白の騎士にハンカチを振って別れ、小川をとびこえ、頭上に冠があるのを知る。そして第九章“女王アリス”に移り、「まあほんとにすごいわ、こんなにすぐ女王様になれるなんて考えてもみなかったわー」とつづくのである。この第九章のアリスのせりふは、削除を承諾したドジソンが、第八、第九章を多少とも手直しをしながらつづやいた本心でもあったであろう。どう見てもこの移行は性急すぎるように思われる。

では第八章から【かつらをかぶった雀蜂】への移行はどうであろう。ついさっきまで、うたをききながらうっとり眺めていた、絵のような景色の一部である後ろの森から、深いため息がきこえてくる、というところからそれは始まる。「誰かとっても不幸な人がいるみたい」とアリスは思う。彼女は幸福とはいえない白の騎士と、いまわかれてきたばかりである。ため息を耳にしたアリスは、見てあげよう、とふり返るが、「何もしてあげられそうにない」と小川をとびこえようとする。が、「ちょっとだけどうしたのってきいてあげよう」と思いなおし、ぎりぎりのところで踏みとどまる。「いったんとび越えたら何もかも変って、助けてあげられなくなるから」といいながら雀蜂のところへゆく。ここ

で一たんとびこえたら何もかも変るとするのは、‘女王になること’を意味している。

雀蜂ははじめぶりぶりしていたが、しばらくして「かつらの具合が悪いからだよ」といってしまうと急におだやかになる。具合が悪いから黄色のハンカチでしばっているが、「これは慢心にも効くよ」とアリスに教える。黄金の冠をいだく女王の慢心に忠告を与えたわけだが、アリスには何のことかわからない。すると「そのうちお前さんもかかる」と彼女の慢心を予言し、そうならないよう警告する。ハンカチをほどくとかつらも派手な黄色でもつれていた、というが、これは第七章の「ライオンとユニコーン」で王位争いに勝ったライオンの頭を思い出させる。身上話をきいてあげたあと、たち去ろうとするアリスに、雀蜂は「さようなら、ありがとう」と、感謝の言葉をかける。

雀蜂の「ありがとう」という言葉を反芻しながらアリスはふたたび丘をかけおり、ちょっとでも、可愛想な年取った雀蜂をなぐさめてあげられてよかった、とうれしく思う。こう見てくると、「かつらをかぶった雀蜂」は、移行のパターンからも、場面の展開かわも、そこに見られるアリスの変化からも、一挿話とみるよりは、第八章につづく章、つまり第九章と考えるのが妥当ではないかと思われる。

第八章で白の騎士とともに、「鱧の目」という詩の中で‘老い’について学習したアリスは、次に雀蜂と出会った時、アリス自身と、白の騎士、そしてより年を取った雀蜂の三世代にわたる世代観を実感し、勇敢に老いと向き会い、さきの学習につづく実習を経験する。第八章の終りでいくぶん寂しそうに自分からアリスばなれしてゆく白の騎士といい、アリスが心からいたわる雀蜂といい、ふたつながら、成長し、自立してゆくアリスにとって、通過儀式的意味をもったものである。エドワード・ギリアノは、「かつらをかぶった雀蜂」でアリスが魅力ある少女になっているので、この挿話を讀んだことで作品全体に対する感じ方が変わった、といっているが、筆者も同感で、この挿話ぬきの『鏡の国のアリス』はこの物語の全体の味をそこなっているのではないかとさえ思う。

こう考えるとき、さきにガードナーが解説の中でうち出した「かつらをかぶった雀蜂」の本質的な価値の問題もおのずから判明する。したがって将来「かつらをかぶった雀蜂」も組み込まれた完全な『鏡の国のアリ

ス」を手にする時がくることも夢ではないかもしれない。

おわりに、ドジソンが1869年3月13日、メアリ・マクドナルドに宛てた手紙を引用しよう。われわれ『鏡の国のアリス』読者にとって、いろいろな事がらを語りかけ、当時の彼の心象風景をあますところなく伝えている名文である。

いやはや、きみはまったくクールなお嬢さんですね！

返事を待っているわたしに、こんな何週間も待ちぼうけを食わせておいて、あげくのはてに、すまして別の話を書いてくるんですからね。まるでなにごともしなかったみたいに！

忘れもしない去る1月の26日、わたしはきみに「ドイツ語訳の『アリス』をあげましょうか」という手紙を書きました。(いいですか、これは過去形というのですぞ、おそらくわたしは決して二度とこのことについて手紙を書くことはないでし^ょう——これは未来形)。

さて、そのとき以来、日は流れ—そして夜も流れて(わたしの記憶が正しければ、昼が二回かそこら流れるあいまに夜が一回流れるはず)です。

——なのに返事はありませんでした。やがて週が流れ、月も流れて、わたしはだんだん年を取り、だんだん痩せてゆき、だんだん物悲しくなりました。

——なのに返事はありません。

やがてわたしの友だちがこう言うようになりました——「どうした、髪の毛がなくなったじゃないか？」とか、「おーい、ホネカワスジエモン！」とか、まあそういったお世辞です。そしてやがて——でももうよみましょう。お話するのも怖ろしいことですから。ただひとことだけ言うとなれば、すなわちつぎの事実です——こうして何年も何年も待ちわび待ちこがれているあいだ(1月26日以来それだけの年月がたったのです。とにかく、オックスフォードではわたしたちはすぐく速く生きていますからね)、この石のように冷たい心をもった女の子から、返事はありませんでした！

そしてやがてある日、お嬢さんは何食わぬ顔をして手紙を書いてきて、こう言うのです——「ねえ、ボート・レース見にいらっしやいよ！」そこでわたしは、うめきながらこう答えます——「ち

ゃんと見てるさ、暴徒レースならね、人間というのはなんとという恩知らずな暴徒たちなのだろう！ そしてその中でも、とびきり恩知らずで、誰よりもたちが悪くて、いちばん——」涙がのどに、いや、ペンにこみあげてきて、もうこれ以上は書けません。^{*50}

註

- I. 1. S. H. Williams and F. Madan, *The Lewis Carroll Handbook*, rev. by R. L. Green and D. Cruch (1979, Dawson), P. 29及びP. 33
2. Morton N. Cohen (ed.), *The Letters of Lewis Carroll* (1979, Macmillan), Vol. I : ca. 1837—1885, P. 811
3. *Handbook*, P. 32
4. *Letters*, Vol. I, P. 94; Derek Hudson, *Lewis Carroll An Illustrated Biography* (1978, Meridian Book), P. 148; D. ハドソン, 高山訳『ルイス・キャロルの生涯』(1976, 東京図書), P. 177, 英国版のオリジナルは1954年刊
5. *Letters*, Vol. I, P. 94 note
6. Morton N. Cohen, "So You Are Another Alice", *New York Times Book Review*, November 7, 1971, supplement, P. 2; Hudson, *Illustrated Lewis Carroll*, P. 153; ハドソン『キャロルの生涯』P. 182
7. Hudson, *Illustrated Lewis Carroll*, P. 152; ハドソン『ルイス・キャロルの生涯』P. 179
8. *Letters*, Vol. I, P. 182; Martin Gardner (ed.), *The Annotated Alice* (1965, Penguin), P. 180; 邦訳, ルイス・キャロル著, マーティン・ガードナー注, 高山宏訳, 『鏡の国のアリス』(1980, 東京図書), PP. 16—17
9. R. L. Green (ed.), *The Diaries of Lewis Carroll* (London: Cassell, 1953), P. 300; *Letters*, Vol. I, P. 182
10. *Letters* Vol. I, P. 182
11. *Letters* Vol. I, P. 79
12. *Letters* Vol. II, ca. 1886—1898, P. 949; M. Cohen, "So You are Another Alice", P. 20
13. *Diaries*, P. 498
14. *Handbook*, P. 63
15. Hudson, *Illustrated L. Carroll*, P. 148; ハドソン『ルイス・キャロルの生涯』, P. 178
16. *Handbook*, P. 62
17. Hudson, *Illustrated L. Carroll*, P. 152; ハドソン『ルイス・キャロルの生涯』, P. 181
18. *Handbook*, 図版Ⅷ, Ⅷ, (P. 164 とP. 165の間)
19. *Letters* Vol. I, P. 106, note 3
Henry Parry Liddon はのちにセントポール教会聖堂参事会員となった人だが、ドジソンとはうまが合い、1867年7月13日から9月14日まで二人はモスクワ旅行をしている。

【鏡の国のアリス】の一考察

20. Hudson, *Illustrated L. Carroll*, PP. 152-3; ハドソン【ルイス・キャロルの生涯】、P. 181
21. *Letters* Vol. I, P. 124
22. *Letters* Vol. I, P. 149によれば, John Crawford Wilson, *Elsie: Flights to Fairyland, etc.* (1864) とある。
23. *Letters* Vol. I, P. 148, note 1
24. *Letters* Vol. I, P. 155; 高橋訳【少女への手紙】(1978, 新書館), P. 70
25. キャロル, 柳瀬訳【かつらをかぶった雀蜂】(1979, れんが書房新社), PP. 13-16にファクシミリで再現されている; *The Annotated Alice*, P. 221, note 4; 高山訳【鏡の国のアリス】、P. 59
26. Cohen, "So You Are Another Alice," P. 19
27. *id.*, P. 2; Gardner, *Annotated Alice*, P. 190; 高山訳, 【鏡の国のアリス】 P. 26; Hudson, *Illustrated L. Carroll*, P. 153; ハドソン【ルイス・キャロルの生涯】、P. 182
28. ハドソン, 【伝記】 P. 183 (訳注)
29. Hudson, *Illustrated L. Carroll*, P. 153, ハドソン【ルイス・キャロルの生涯】 P. 181
30. *Handbook*, P. 63
31. Hudson, *Illustrated L. Carroll*, PP. 153-4; ハドソン, 【ルイス・キャロルの生涯】 P. 183; Cohen, 'So You Are Another Alice', P. 19; *Handbook*, P. 61; *Letters* Vol. I, P. 163; *Annotated Alice*, P. 196; 高山訳【鏡の国のアリス】、P. 34
32. *Handbook*, P. 64; Hudson, P. 154; ハドソン【ルイス・キャロルの生涯】、P. 184
33. *Diaries*, P. 306; *Letters*, Vol. I, P. 163
34. *Handbook*, P. 60
35. Hudson, P. 154; ハドソン【ルイス・キャロルの生涯】、P. 185
36. *ibid.*
- II. 37. ルイス・キャロル, 解題 マーティン・ガードナー, 柳瀬尚紀訳【かつらをかぶった雀蜂】(1978, れんが書房新社), P. 10
38. *Annotated Alice*, P. 221, note 4; 高山訳【鏡の国のアリス】、P. 59, 注4
39. Hudson, P. 154; ハドソン, 【ルイス・キャロルの生涯】、P. 184
40. 【かつらをかぶった雀蜂】、P. 9
 なお、9ページ一行目に……サザビー・パーク・バーネット社は、6月3日付のカタログに…とあるが、6月3日は競売日であるから6月3日のオークションのカタログのことであろう。
41. 今は彼のコレクションに入っている。77年にはアーマー氏はニューヨーク在住となっていたが、79年版 *Handbook* では故人となったことを知らせている。P. 64
42. *Letters*, Vol. I, P. 125 note 4
43. *Handbook*, P. 232
44. 注37参照, なお、これに先立ち、高橋康也訳「展望」228号, (1977年12月号,

筑摩書房); 高橋康也訳『ルイス・キャロル詩集』折り込み付録として再録, 1977年12月, 筑摩書房)がある。ユリイカ(1978年12月号, 青土社)には早くもパロディが見られる。

45. 高山訳『鏡の国のアリス』P.168; *Annotated Alice* P.314
46. id. PP.51—52; *Annotated Alice*, P.212
47. id. P.118; *Annotated Alice*, P.263
48. id. P.159; *Annotated Alice*, P.307
49. 『かつらをかぶった蜜蜂』, P.23
50. *Letters*, Vol. I, P.126; ルイス・キャロル, 高橋訳『少女への手紙』P.28
なおメアリ・マクドナルドはジョージ・マクドナルドの次女。

An Approach to *Through the Looking-Glass*

Kumiko TAIRA

This paper aims at following the process of evolution of *Through the Looking-Glass* in the mind of the author, Lewis Carroll, by using the two volumes of *The Letters of Lewis Carroll* (1979) and *The Lewis Carroll Handbook* (revised edition, published in 1979), and determining the original place where "The Wasp in a Wig", whose proof-sheets were newly found in 1974, is supposed to be restored.

The present paper is divided into two parts: the first part is concerned with the forming process of *Through the Looking-Glass* by the hand of Lewis Carroll, and the second discusses the essential value of the "Wasp" episode and the problem of whether or not this newly found fragment is an episode or a chapter.

北星論集（第18号）正誤表

		誤	正
151頁	22行目	ここで、 u'' は……	ここで、 ω'' は……
152頁	3行目	pp. 348	pp. 335
154頁	5行目	$F_{.05}(28, 30) \approx 1.60$	$F_{.05}(28, 30) \approx 1.60$
167頁	4行目	はじめのノ字が出 すぎている	行を右へノ字おく り上3行とそろえ る
177頁	2行目	註注アリス	詳注アリス
178頁	5行目	フンミング	フレミング
180頁	5行目	蜂密	蜂蜜
	8行目	俯瞰	俯瞰
182頁	16行目	場面の展開かわも	場面の展開からも
185頁	13行目	L. Carroll	L. Carroll
213頁	3行目	第25条	第25a条